2025年2月25日発行　第1号

過去と未来

編集者
岡山市立蛍明小学校

今でも残る辛い記憶

（明渠さんのお話のときの様子）

一九四五年、今から八十年前に岡山空襲がありました。空襲で亡くなった人は一千〇〇人以上でとても大きい戦争でした。私たちは明渠さんから当時のことをききました。

戦争中は、働いて作ったお米や麦は、国に送られてしまい、食べられなかったためさといもやなんきんを食べていた。山で食べられるものは何でも食べていた。そして、一カ月に一～二回、食べ物の配給があったりど、一人につきいりこ二匹など、少ない量だったそうです。

今では、主菜、副菜、主食をあたりまえのように、食べていますが、当時の人は一日の食事の量がとても少なく、生活するのが大へんだったのだなと思いました。

当時、学校の体育の授業のほとんどが、今のようなスポーツや体操ではなく、敵をたおす訓練でした。

このように戦争中はとても厳しい生活を送っていました。

今の自分たちがどれくらい「あたりまえ」にやってきていたことや言ったことが、当時の人たちは、その「あたりまえ」がなかった。だから、一つ一つの「あたりまえ」にできていることなどに感謝して、生活をしないといけないなと思いました。

岡山空襲と大原美術館が行った絵画疎開との関係

（大原美術館）

大原美術館とは、岡山県の倉敷市にあり、事業家の、大原孫三郎が創設しました。

大原氏は、岡山空襲の被害に作品が遭わないため、絵画疎開をすることを決断しました。疎開先は、農家をしていた人の蔵を選びました。疎開を引き受けた三宅さんは、絵画疎開について、誰にも話さず、秘密にし、守ったのです。三宅さんは、他に蔵があるかわからないし、ことわりにくかったのではないかなと思いました。しかし、自分にできることは少しでもしたいと思い、命にかえても守ろうという気持ちは、強くあったのかなと思いました。

一方で、疎開ができなかった作品もありました。ロダン作の像は、金属回収されようとしましたが、美術館側は、申請書までかいて作品を守ろうとしました。

他の作品は、美術館に展示していましたが、戦争中でも美術館に足を運びにくる人はいたそうです。

しかし、戦争はひどくなる一方。その中でも「命を落としてでも作品を運ぶ」と覚悟をしていた人がいたことを知りました。

私はそのことを知って、戦争のなか、強い覚悟をするほど、地域の人にとっては大切な存在であり、次の世代へとつなげていきたいと思っていたのだと感じました。

大原美術館を創設した大原孫三郎とは

大原氏は、事業家で、大原美術館や倉紡中央病院（現倉敷中央病院）などの設立をし、数多くの社会貢献をしました。その中でも大原氏は、救貧という分貧しい人を助けるのではなく、防貧という貧しくなる人をなくすシステムを目指しました。

他にも大原氏は戦争の前に町の人が起こした米そうどうのときも、七千五百円（今でいう三百万円）を出し、米そうどうは、おさまりました。このように大原氏は、人のためにたくさんの行動をしました。

町の人のために自分のお米を出したり、数多くの社会貢献をしていて、率直にすごいなと思いました。

このマークは、どこから見ても「人」とみえるように工夫して作られたそうです。

私はこのマークを見て、人のために数多くのことをし、人と人との心をつなぐことを目標としていた大原氏に合っているなと強く感じました。それと同時に自分も人と人との心をつなげる人になりたいなと思いました。

10 人や国の不平等をなくそう

世界にはたくさんの不平等があります。同じ国や地域の中でも、貧しい人と豊かな人、性別、人種、宗教など。戦争も同じです。

そんな世の中を変えるために私たちができることは…

みんな人それぞれに違いがあることを知り、違いがあるのがあたりまえなのだと理解すること。

お互いの違いを認め、相手を大切にする考えが必要です。

私は、この三つを色んな人に知ってもらい、自分も行動をしたいなと思っています。

まとめ・編集後記

私はこの平和学習をとおして、岡山空襲は当時の人にとってどんな記憶であったのかや、失った物、心の大きさを知ることができて、次の世代に伝え、考えてもらうべき記憶だと思いました。

そして、二度と戦争を起こさないためにも、自分たちが今している生活の中の「あたりまえ」などをありがたく思って生活をし、自分に何ができるのか考え、行動することが大切だなと思いました。

「あたりまえ」に対して感謝をして、行動、生活をする